

平成30年度第2回若葉区支え合いのまち推進協議会議事要旨

1 日 時 平成30年9月26日（水）10時00分～12時30分

2 場 所 若葉保健福祉センター3階 大会議室

3 出席者

- (1) 委員 赤間委員、荒木委員、井崎委員、岩澤委員、江口委員、尾出委員、大嶋委員、小川委員、尾崎委員、菊次委員、小出委員、小林委員、酒井委員、千脇委員、津田委員、角田委員、鶴岡委員、東田委員、長友委員、西村委員、縫部委員、花澤委員、林委員、日暮委員、布施委員、真鍋委員、山内委員、山崎委員、和田(文)委員
- (2) 事務局 富田保健福祉センター所長、飯島地域振興課地域づくり支援室長、石毛社協区事務所長、鈴木社協区事務所副所長、田中高齢障害支援課主査、木内高齢障害支援課主任保健師、小泉地域福祉課主任主事

4 議 題

- (1) 第4期若葉区支え合いのまち推進計画重点取組項目の進捗状況記録票及び地域福祉活動取組票について
- (2) 「平成30年7月豪雨災害」における災害ボランティア運営支援のための職員派遣について
- (3) その他

5 議事の概要

- (1) 第4期若葉区支え合いのまち推進計画重点取組項目の進捗状況記録票及び地域福祉活動取組票について
東京情報大学、あんしんケアセンター千城台、生活支援コーディネーター、中野学園の4名が発表を行う。
- (2) 「平成30年7月豪雨災害」における災害ボランティア運営支援のための職員派遣について
鈴木社協若葉区事務所副所長が発表を行う。
- (3) その他

6 会議経緯

- (1) 第4期若葉区支え合いのまち推進計画重点取組項目の進捗状況記録票及び地域福祉活動取組票について
○事務局

前回の推進協議会で委員の皆様には第4期若葉区支え合いのまち推進計画重点取組項目進捗状況記録票及び地域福祉活動取組表の書式を提示し、提出していただいたものを取りまとめた。

今年度は、新しい計画を持って動き始めたところであるので、本協議会にご参画いただいている皆様それぞれの取組み内容を共有して、お互いの活動の参考にしたり、協力し合ってコラボレーションする活動に発展させるなどしていただきたい。

第2回推進協議会では、提出された表を基に、各委員の皆様から発表をお願いしたい。

今回の発表案件は、運営企画委員会に諮らせていただき、次の4委員をお願いすることとなった。

今後皆様との連携や協力が考えられる今回新規に参加された2大学のうち1委員、

次にあんしんケアセンターが1か所増えたこともあり、活動内容をご存じない委員もいらっしゃるのではないかとということから、5つのあんしんの中から代表で1委員、3つ目としては、比較的新しい制度である生活支援コーディネーター、4つ目としては、継続して推進協に参加されている中野学園さんから、社会福祉法人の地域貢献の考え方などを含めてお願いしたい。

なお、14の地区部会については、第4期計画の初年度が始まったばかりで取組実績や今後の課題等がまだ空白の状態のため、実績が出る次回以降に発表していただきたい。

○委員長

東京情報大学について西村委員から発表をいただきたい。

○西村委員

東京農業大学の兄弟校として、総合情報学部が30年前に若葉区御成台に設立した。

情報化社会と少子高齢化社会が急速に進行する中で、現在と未来の懸け橋となるような人材を育てるために、総合情報学部の改革を進めるとともに、平成29年に看護学部が新設された。

看護学部は100名×4学年となる予定であるが、現在は2年生までが在籍している。100名の中で20名の成績優秀者が保健師資格を取れる予定である。男子学生も多く、100人中20名いる。学内で実習を行ったあとに、病棟実習を行う予定である。2018年8月には東日本大震災の被災者支援として希望する学生が宮城県三陸町にボランティアとして赴いた。

看護学部設立と同時に、情報通信機器を活用して地域ケア・医療を推進する研究開発を行う「遠隔看護実践研究センター」を開設した。総合情報学部は1学年400名おり、情報社会の時代にパソコンや情報に強い学生の育成を行っている。

地域貢献としては、図書館や食堂などを地域に開放している。また様々な公開講座やシンポジウムの開催、生涯学習への対応を行っている。自然豊かな地域を生かして、里山研究のケビン先生を講師として地域の人と周辺の里山を歩いてカントリーハイクマップの作成を行った。

現在取り組みつつある看護学部の地域福祉活動としては、若葉区内の住民を対象とした健

康支援ニーズや、高齢者を対象として「動きの能力」学習プログラム、「千葉いのちの電話」のボランティア相談員対象の継続研修、文化祭である翔風祭での認知症高齢者の介護相談、区民祭りでの「健常児と障害児が一緒に遊ぼうプロジェクト」、学内に新設したヘルスケアステーションを通じた近隣住民を対象とした健康増進活動である。

地域の皆様には、ぜひ情報大の施設、教員、学生を活用していただきたいと思っている。

○委員長

ただいまの説明に対し、何か質問等があれば、発言をお願いしたい。

○委員長

市民公開講座を行っていると聞いたが、出前講座を自治体がお願いすることができるか。

○西村委員

出前講座を検討していたころである。ご要望があれば行っていきたいと思っている。様々な専門分野の教員がいるので、依頼の内容に合わせて行いたいと思っている。

○委員長

学生もお願いすることができるか。地区の老人クラブでは会員が講師を行うなどをして、知性を高める活動をしている。

○西村委員

まだ2年生までしかいないので、看護学や社会性はまだ身に着けていないが、それでも大丈夫でしたら、学生も行くことができる。

○委員長

小学生にも講座を開いたりしてもらっている。ぜひプレゼンテーションの練習の場にしてほしい。

○委員

遠隔看護医療とはなにか。

看護学と連携している病院はどこか。

○西村委員

地域で実習を受け入れてくれる病院で実習を行っている。近くでは徳洲会病院、みつわ台病院、柏戸病院、市立海浜病院や、地域の様々な施設で実習を行っている。100以上の施設や病院を使って実習を行っている。

遠隔看護医療とは、離れたところにいる在宅高齢者にコンタクトできるシステムであり、企業と連携して構築している。先ほど説明したヘルスケアステーションがその窓口になっている。ホームページなどでも情報を載せていく予定。

○委員

出前講座の時の講師料や、謝礼について教えてほしい。

○西村委員

一律の値段などは決まっていないので、それぞれ相談してほしい。

○委員長

次に、あんしんケアセンターについて、尾崎委員から発表していただきたい。

○尾崎委員

若葉区内の5つのあんしんケアセンターを代表して発表させていただきたい。様々な相談業務や活動を幅広く周知させていただき、今後の連携にご参考にしていただければと思っている。

「総合相談業務」ということで、高齢者の皆さんや、その家族、近隣に暮らす人の介護に関する相談への対応、その他健康や福祉医療や生活に関することなど様々な困りごとに対応している。相談内容としては、介護保険制度の相談が半分以上を占めている。

総合相談業務を通じて行っているのが地域ケア会議である。若葉区地域ケア会議を平成24年から開催しており、推進協議会からも津田委員長に参加していただいている。

処遇困難ケースに対する地域ケア会議や、地域の課題解決にむけての協議のための地域ケア会議もおこなっている。

センターで相談が来るのを待つだけではなく、我々が出向いて相談に乗ることで、早い段階で相談に応じたいということで、若葉いきいきプラザでの出張相談を行っている。週1回2時間開催しており、一回当たり3、7人の相談に応じている。

「包括的、継続的ケアマネジメント業務」として、地域のケアマネジャーの支援や、より暮らしやすい地域にするために、様々な機関とのネットワークを推進するということで、若葉区多職種連携会議や、若葉区主任介護支援専門員連絡会、ソーシャルワーク連絡会を行っている。

「権利擁護業務」として、地域に出向いて消費者被害防止や成年後見制度の講座を行っている。

また区内の中学校に出向き認知症サポーター養成講座を行っている。3年かけてすべての中学校を回ることで、すべての生徒が講座を受けられるようにしている。寸劇をいれ、先生や地域の人に参加してもらうことで、生徒が興味をもって講座を受けてもらえるように工夫している。

「介護予防ケアマネジメント業務」として、要支援と判定された方の介護予防や日常生活支援等のケアプランの作成を行っている。困ったときには介護保険を使ってくださいと話しているが、なるべく健康寿命を延ばして、介護サービスを使わなくても済むように生活をして行きましょうという話も地域の皆様にしている。

「介護予防普及啓発、地域介護予防活動支援」ということで、地域において介護予防に向けた取り組みが自主的に実施されるよう、介護予防の基本的な知識や活動の周知、介護予防に資する地域活動の育成及び支援を行っている。

地域のサロンにお邪魔させていただいて、介護予防の話をしたり、あんしんケアセンター主催の介護予防教室を行っている。また千葉東警察と介護サービス事業所の情報交換会や、区民祭りでの周知活動、中学校での高齢者疑似体験などの講座を行っている。

あんしんケアセンターや、それに関わる関係機関が連携して、支え合いのまちを推進していければと思っている。

○委員長

ただいまの説明に対し、何か質問等があれば、発言をお願いしたい。

○委員長

高齢者の相談の場として、あんしんケアセンターを紹介している。とても頼りにしている。

○委員長

次に、生活支援コーディネーターについて、井崎委員から発表をしていただきたい。

○井崎委員

若葉区社会福祉協議会が、今年度から生活支援コーディネーターを委託されている。生活支援コーディネーターは地域包括ケアシステムの一つの位置づけとされている。高齢者の方々が住み慣れた地域で安心して暮らし続けるために必要なことは地域づくりである。健康寿命をのばすために、人と話をし、活動に参加し、体操をするというのが必要になってくる。集いの場や支え合い体制づくり、健康づくり、見守り活動など地域の取り組みこそが地域包括ケアシステムである。

千葉県高齢者保健福祉推進計画において、高齢者が安心して暮らせるまちづくりと地域ケア会議の推進、生活支援体制の整備、拡充のために、市町村が生活支援コーディネーターを設置するというようになっており、若葉区では、社会福祉協議会がその役割を担っている。

生活支援コーディネーターの役割として、①地域の支え合いの活動や集いの場の調査、②地域で必要とされるサービスの調査、③ニーズに即したサービス提供団体の紹介、④地域と協働で課題解決に向けた検討、⑤住民同士の支え合い活動の立ち上げ支援、⑥ボランティアの育成、⑦サービス提供団体同士の連携、⑧地域課題解決に向けた関係者との打ち合わせ会議の8つの業務と、生活支援サービス情報の見える化と公開、生活支援サービス充実に関する研究、広域での生活支援体制整備に向けた調査、調整を行うという役割がある。

今までの活動として、高齢者のためのいきいき活動マップを作成し、地域資源を活動マップに落とし込んだ。この活動マップは今後発行の予定はないが、生活支援コーディネーターが集めた地域資源の情報は、今後何かしらの方法で発信していきたいと思っている。生活支援サービスについては、厚生労働省のページで検索ができる。

他には、支えあいの活動の立ち上げや、今ある地域資源の活性化、たすけあい団体の活性化支援などを行っている。

若葉区内には様々なたすけあい団体が活動しており、団体が交流できる場として、「地域交流、話し合いの会」を昨年度2回行った。第3回は平成30年10月24日に予定している。今後も定期的に集まって勉強会をするなどの組織化を検討している。

今後の展開として、今後も地域資源や生活支援ニーズの把握のために、民生委員のところに出向いて、情報収集を行っていきたい。また様々な福祉相談からどのような地域資源が必要かCSWと連携し、一緒に考えていきたい。地域包括ケアとして、重要な見守り、支えあい活動が若葉区内全域で創出するように支援していきたい。

他団体との連携としては、今まで連携している団体のほかに、NPOやイオン、コンビニなどの企業とも連携していきたいと思っている。

今後も地域での困りごとや、このような資源があればということがあったら、生活支援コーディネーターに声をかけていただきたい。

○委員長

ただいまの説明に対し、何か質問等があれば、発言をお願いしたい。

○委員

生活支援コーディネーターや地域包括ケアの推進役で重要な役割だと思う。全住民の舵取りという役割でもあり、範囲も広いと思うが、今後の展望はどう考えているか。

○井崎委員

まだやり方については模索状態である。支えあい活動団体との連携を通じて、活動の重要性を他の地域に知ってもらい、活動を広げていきたい。相談を待っているだけではなく、地域に出向いて情報を得ていきたい。

○委員

生活支援コーディネーターの役割の中での「地域」とは何を指しているのか

調査や生活支援ニーズの把握したものは、どこにフィードバックしていくのか

○井崎委員

地域とは若葉区全体の地域を指している。フィードバック先としては地域である。地域資源を把握した後に、その情報を必要としている個人、団体につなげていき、そこから地域課題をみつけていくことが必要と考えている。

○事務局

生活支援コーディネーターを委託している千葉市から補足の説明をしてよろしいか。

○委員長 お願いいたします。

○事務局

今後はあんしんケアセンター単位まで配置を広げていくことを考えており、今年度モデル的に中央区で二層配置を行った。あんしんケアセンターの単位で、皆様と地域づくりについて考える支援コーディネーターを配置するという方向性で千葉市は考えている。

生活支援コーディネーターの役割が重たいというご指摘も多くいただいているが、生活支援コーディネーターだけでは思うような活動はできないと考えている。皆様が、話し合いや会議の場でそれぞれの思いを共有したり、参考にしたり、困りごとを相談し、地域づくりを進めていく、それを助けていくのが生活支援コーディネーターの役割と考えている。この推進協議会も生活支援コーディネーターの役割をバックアップしてもらえる協議体と考えている。委員の1人として生活支援コーディネーターが参加しているので、この会でもご助言をいただければと思っている。発展途上であるため、行政サイドにもご意見いただければと思っている。

○委員長

支えあいの団体の集まりに2回参加している。1回目は、ボランティア活動を担っている人材育成について話があがった。2回目はボランティア保険について、ことぶき大学の担い手について話があがった。第3回は今まで集まって出てきた問題点を、講座のような形で行ってもらえればとても参考になる。

数年前に、大嶋委員と各自治会を回り、自治会に支え合い活動の啓発活動を行った。そこ

から何件か支え合いの会が発足した。支え合い活動の立ち上げの支援ということが生活支援コーディネーターの大事な役割だと思う。

○委員

行政に質問したい。生活支援コーディネーターは各団体をつなげる難しい役割であるが、なぜ行政がやらないのか

○事務局

地域包括ケア推進課の職員は11名で、その職員が地域に出て話を聞いたり、支援をしたりしていくことは難しかった。民間企業の持つノウハウやスピード感を行政サイドも学び、地域づくりを進めていこうという考えから、プレゼンテーションをしてもらった中で、熱意ある団体を選ばせてもらった。若葉区は昨年度まで社会福祉法人に担っていただいていたが、本来の活動に携わるための人員不足ということから、他の団体に譲りたいという意向があり、再度公募をかけて、社会福祉協議会に担っていただくことになった。それぞれの団体の良さを生かしていただきながら、行政がしっかり支援し、6区の足並みが乱れないように進めているという状況である。行政が足りない部分を優秀な民間団体にご協力をいただき進めている制度である。行政としてもしっかり取り組みたいと思っている。

○委員

みつわ台地区では、地域ケア会議を予定しており、地区部会とあんしんケアセンターで相談しながら進めている。その相談役として生活支援コーディネーターも入ってほしい。自分達からも生活支援コーディネーターにこういう支援をしていきたいと声を出していくことも必要だと思う。

○委員長

以前担当していた生活支援コーディネーターは、老人会などの活動を見学に回り、活動の現状や困りごとなどを聞いていた。今後もいろいろ回って情報を集めてほしい。

○委員長

最後に中野学園について、小林委員から発表していただきたい。

○小林委員

中野学園は、昭和63年開設。今年で31年目になる。夏休みにプールや体育館を使い、子どもたちを預かる地域支援も行っている。

入所、短期入所、通所事業、グループホーム、放課後デイや地域活動支援センターなどの事業を行っており、地域活動支援センターは、今まで就労していた方の悩みの相談の場や息抜き場となっている。

地域福祉を支える重要な社会資源として、地域に根ざした実践活動の展開を目標としている。地域資源として、福祉避難場所として市から委託を受けている。それは大事な支援の一つと考えている。

また、いろいろなイベントを通して、地域と関わっている。4月にスポレク祭りを行っており、中野地区の老人会の方に参加していただいたり、土気南中学校の生徒に、ボランティアとして来てもらっている。夏祭り、福祉フェスティバル、バザーなどは外部の団体も呼ん

で行っており、周辺の地域の方の楽しみの１つとして、多くの方が参加してくださっている。

このように地域の方と関わらせていただいているおかげか、新しいグループホームを設立する時には、地域の反対の声があがるのではないかという予想もあったが、全く反対の声はなく、温かく受け入れてもらえた。

これから学園として、地域貢献に力を入れていきたいと思っている。農林水産省、厚労省などが連携して力をいれている農福連携などを取り入れたいと思っている。

施設周辺の中野地区には、耕作放棄地が多く広がっている。そういう土地を活用して、地域の方から農業のノウハウを学び、学園の利用者と職員が働き手になり、一緒に作物を育て、育てた作物を、施設の食堂で調理をし、地域で販売したり、配食サービスなどを行ったり、こども食堂を設立したいと思っている。周辺の高齢化している地域に定期的に販売に行くことで、地域の見守り役を担うことができ、こども食堂を設立することで、高齢者と子供が関われるような場が提供できると思う。

中野学園は障害者の支援をする場所であるが、先々は高齢者や子どもなど誰にとっても住みやすい地域づくりの支援をしていきたい。今はまだ構想段階であるが、少しでも実現していきたいと思っている。

中野学園の持っている資源やノウハウなどを地域の方に活用してもらい、また皆様からも知識や情報をいただいて、学園として新しい事業やサービスを作りあげ、その実践をめざしていきたい。

○委員長

ただいまの説明に対し、何か質問等があれば、発言をお願いしたい。

○委員長

地域の方と融和して活動している話をしていただいた。身近に障害者の方が暮らすというのは、まだ抵抗があると思う。私の地域に認知症のグループホームがあるが、２か月に１度、定例で話し合う機会を持っている。文化祭で認知症の方の作品を出してもらったり、夏祭りなども一緒に行っていく中で、地域の方の抵抗もなくなっている。学園の近くの公民館や自治会の活動の中にも入り込んでいくというのも１つの融和の手法だと思う。

○委員長

次に議題２「平成３０年７月豪雨災害」における災害ボランティア運営支援のための職員派遣について、鈴木社協若葉区事務所副所長に発表をお願いしたい。

○千葉市社会福祉協議会若葉区事務所 鈴木副所長

平成３０年７月豪雨災害における災害救援職員派遣として８月２１日から２７日まで広島県の坂町小屋浦地区に派遣された。海山に恵まれた交通の便がいいところであるが、高齢化率が４０％と高い地区である。

坂町災害たすけあいセンターの出先として、小学校校庭を利用した小屋浦サテライトが設立された。

地区にある２本の川が氾濫し、多くの被害が出た。砂防ダムの決壊や、木が橋を堰き止め

たため土石流が発生し、全世帯が被災した。汚泥腐敗の悪臭や、粉じん等で環境は悪化した状態であった。

小屋浦サテライトは7月9日に開所。活動内容は家屋の泥出し、家財等の運び出し、家屋等の掃除、避難所の環境整備などを行っていた。

今回の派遣は、災害支援協定により、全社協から協力依頼があり、千葉市社協より延べ6人が交代で派遣された。県内の他市社協職員や他県の社協職員の方とチームを作り、サテライトの運営支援を行った。ボランティアの受け付け、オリエンテーション、マッチングや被災者のニーズ調査などの活動を行った。

今回の被災地域の特徴的な取り組みとして、全13常会の各常会長が、自らの常会エリアのニーズを把握し、サテライト運営や、マッチング後のボランティア送り出し、必要機材の説明などをすべて担っていた。サテライト運営の主要部分に住民主体の活動が組み込まれていた。それが他地域の災害ボランティアセンターと大きな違いであった。このメリットとしては、常会長は平時から地域住民とつながりがあるため、現在のニーズの把握や、実情把握をきめ細かくできていたこと、また常会長がボランティアと被災住民間のクッション役となっていたことである。

課題としては、まずは常会長1人の負担が大きいこと、また地域住民のニーズの情報が、常会長の頭の中だけにあり、サテライトの中で可視化ができないため、常会長不在時にボランティア活動が進められない時があったことである。

チームが考えた解決案としては、常会長頼みの体制を改善し、職員やボランティアが協力し、常会長を支える体制づくりを行うことと、常会長1人では拾いきれない情報もあるため、ローラーニーズ調査を行い、地域住民ニーズを可視化し、ボランティア全体が把握できるようにすることが必要であると考え、提案を行った。

社協は災害支援協定を結んでおり、まずは県社協、県内市町村社協が連携し、災害の大きさにより、関東ブロック、全社協と連携していく。社協の役割は、災害ボランティアセンター設置や運営支援、ボランティアコーディネート、災害関連情報収集、発信などである。

今回の活動を振り返って感じたことは、被災地のサテライトに対して、本来はこのように活動するべきだという押しつけをするのではなく、地域に合わせた活動を支援していく臨機応変さと柔軟性が必要と感じた。成果を出したいが上の支援の押し売りは絶対いけない。常会長との信頼関係を構築し、地域の方の町を想うプライドなどを尊重し、継続的な支援が必要と感じた。

災害が発生しても、これまで通りの暮らしを取り戻せるようにと、現地の社会福祉協議会が活動している。派遣職員はそれをバックアップしている脇役であると感じた。

○委員長

次に「その他」ですが何かあるか

(なし)

特にないようですので、本日の議題はこれで終了したい。

○事務局

推進協議会の次回開催のお知らせについて、今までは、郵送で行っていたが、今後希望される方にはメールでご案内をさせていただこうと考えている。

希望される方は、お帰りの際、事務局までメールアドレスを教えてください。

最後に、次回開催日程は、12月19日（水）を予定している。

閉会